

写真投影法による筑後川中流域の景観評価(2)

九州産業大学工学部 正 員○山下 三平
九州産業大学大学院 学生員 高 畠 律 夫
九州産業大学大学院 学生員 平 島 賢 一

1.はじめに

本研究は前報¹⁾に引き続き、人間の環境理解を把握する方法として「写真投影法²⁾」を適用し、人々が環境を文字どおりどのように「見て」いるかという点と、その見る行為において、見る主体の体験がどのような意味をもっているかに注目して、河川景観の評価構造と人間にとっての意味を明らかにしようと試みる。

2.調査と分析について

調査対象地域は筑後川中流域に位置する田主丸町全域である。この地域は筑後川、巨瀬川、雲雀川、および三津留川などによる多様な水系をもつ。

調査・分析は「写真投影法」に基づいて行った。その詳細は前報¹⁾を参照されたい。被験者は、成人46名、子供49名の田主丸住民であり、彼らの撮影した河川景観の映像件数は、成人が1,716件、子供が1,522件であった。

得られた映像を構成する要素として、〈景観の種類〉、〈護岸の有無〉、〈ごみの有無〉、〈動物の有無〉、〈人物の有無〉、〈樹木の有無〉、〈建物の有無〉、1映像中に占める〈水面の割合〉ならびに〈緑(植物)の割合〉、および被験者自身がなにをとったのかはっきりと表している対象を〈主対象〉として映像構成要素から区別して、その相互関係を調べる。また、成人と子供の比較を行って、住民の体験が景観の構造においてもつ意味を検討する。

3.河川景観の評価構造

(1) 河川景観のパターン

映像構成要素と〈主対象〉の相互関係を数量化III類とクラスター分析により調べ、〈景観の種類〉の違いに基づいて分類すると、成人の場合は6つのクラスタ、子供の場合は5つのそれに分かれる(表-1ならびに表-2)。これらのクラスタと、各クラスタごとに示された〈景観の種類〉、〈水面の割合〉、〈緑の割合〉、これら以外の映像構成要素、および〈主対象〉の内容をすべてもっている映像の頻度分布(図-1ならびに図-2)とから、以下のことがわかる。

〈水面の割合〉は成人も子供も「流軸景」、「対岸景」、

「水面」の順に大きくなり、〈緑の割合〉は逆にこの順に小さくなる。また、〈景観の種類〉が「水面」の場合、「動物」が多く撮影されていることと、「河川構造物」が「対岸景」で撮影されやすいことも、両者に共通している。

成人と子供の大きな違いとして、成人の場合は「流軸景(66.5%)」で、樹木があり、ごみや護岸がない自然な「河道・河道内微地形」や「水面」を見る見方が特化している点があげられる。これにたいし子供の場合は、「対岸景(29.3%)」と「水面(25.3%)」がほぼ等しく、「流軸景(9.3%)」は少ない。成人は立体的構図のはっきりした景観のとらえ方をし、子供の場合は景観として平面的な河川環境のとらえ方をする傾向があることがわかる。成人と子供のもう一つの特徴的な違いは、〈主対象〉としての「水面」が、成人では〈景観の種類〉が「流軸景」であるクラスタにふくまれる一方、子供では〈景観の種類〉が「水面」であるクラスタにふくまれることである。成人の場合「水面」の41.3%が「流れ・流量」の撮影であり、もっとも頻度が高い。一方、子供の場合、「水面」のうちでもっとも頻度が高いのは「水質」の43.3%である。したがってこの違いは、成人が時間の変化を感じさせる水の動的な「流れ」に強い関心があり、子供は静的な「水質」に関心が強いことにそれぞれ関連した構図のとり方によるものと考えられる。

(2) 河川景観と住民の体験

以上の成人と子供の河川景観の把握の仕方の違いは両者の経験の違いによるものと考えられる。そこで、各映像とともに記録された意見や感想のなかから、過去の河川の状態を想起しながら意見等をのべているものを拾い出してみよう。

「昔は……だった」や、「昔から……である」といったことばやそれに近い表現があり、あきらかに過去の想起をしていることがわかるものを拾い出すと、成人の場合、映像件数として647件中164件(25.3%)、人数で17人中16人(94.2%)であり、ほとんどの人が過去を想

表-1 クラスタ分析による河川景観の分類（成人）

	クラス1 (その他)	クラス2 その他	クラス3 (その他)	クラス4 流軸景	クラス5 対岸景	クラス6 水面
景観の種類	その他	その他	その他	流軸景	対岸景	水面
水面の割合		0~10%	100%	10~40%	40~80%	80~100%
緑の割合	80~100%	100%		30~80%	10~30%	0~10%
映像構成要素 (上記3項目 以外)	ごみ・有	人物・有		樹木・有 ごみ・無 護岸・無 動物・無 人物・無 建物・有/無	護岸・有	動物・有 樹木・無
主対象	ごみ	河川占有物 建物 人間活動	道路 交通要因 空地 運送・風景 その他	河川・河 道内微地形 水面 植物	河川構造物 構築	動物

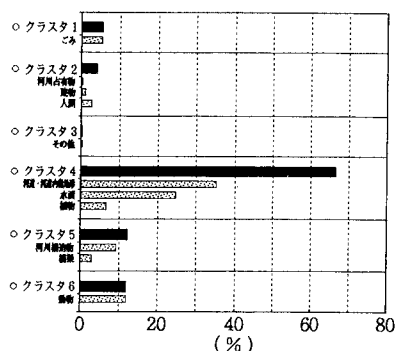


図-1 分類された河川景観の頻度分布（成人）

起しながら河川環境をとらえていたことがわかる。一方子供は映像件数で594件中19件(3.2%)、人数で18人中6人(33.3%)である。この中には親からの伝聞がふくまれているのでそれをのぞくと15件・4人になり、いずれにしても成人にくらべはるかに頻度が低い。

過去の想起について成人に特徴的な点のひとつは、過去の水泳・水遊び、つり・魚とりとその料理、昆虫採集、洗濯・飲料水としての利用、といった水にまつわる体験を語ったものが映像件数の頻度で32.9%、人数のそれで93.8%となり多いことである。また、河川改修による変化を語ったものも多く、映像件数の頻度で33.5%、人数のそれで81.3%である。河川改修については肯定的意見が映像件数の頻度で29.1%、人数のそれで69.2%、否定的なものは映像件数の頻度で7.3%、人数のそれで30.8%となり、肯定的意見のほうが表にでやすいことがわかる。肯定的意見の内容は、用・排水路としての機能が高くなったことへの評価である。様々な体験のないうる川から、用・排水路としての機能が特化したものへと変わりつつあることを認識している成人住民の意見からは、その功罪への複雑な心情が読みとれる。「魚のすむところはかなり減ったが大水の心配は

表-2 クラスタ分析による河川景観の分類（子供）

	クラス1 流軸景	クラス2 その他	クラス3 (その他)	クラス4 対岸景	クラス5 水面
景観の種類	流軸景	その他	(その他)	対岸景	水面
水面の割合	10~20%	0~10%		20~80%	80~100%
緑の割合	40~90%	90~100%		10~40%	0~10%
映像構成要素 (上記3項目 以外)	ごみ・有 樹木・有 建物・有		人物・有	ごみ・無 動物・無 人物・無 樹木・無 建物・無	動物・有
主対象	ごみ 建物・風景 道路 運送 構築 その他	河川占有物 建物 交通要因	空地 人間活動	河川・河 道内微地形 河川構造物	水面 動物

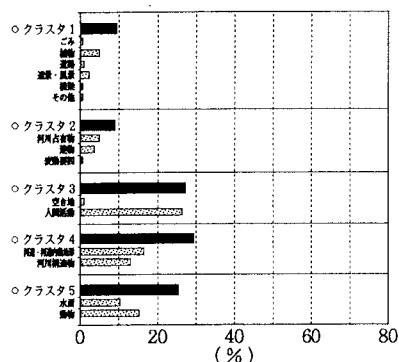


図-2 分類された河川景観の頻度分布（子供）

なくなった」という意見や、「川の護岸も整備されるとその美しさもよいが魚には受難だろう」という意見がみられたが、これらはその様子を端的に物語るものである。

4. おわりに

以上の結果から示唆されることは、住民に認識される河川景観の構成が、時間的な経験のパースペクティブを、空間的なそれへと投影することにより成り立つことである。これには住民が河川環境を「体験」しなくなり、「見る」だけになりつつあるという意味がふくまれる。

子供にとっては「直接体験」の場である河川環境の機能が単純化され、住民の環境認識がそれに基づいて再生産されていくとすれば、事態の深刻さは計り知れないと思われる。それゆえ生態系の保護においては、その環境を人間の直接体験の場として注意深く検討することがぜひとも必要であると思われる。

参考文献

- 1) 山下三平ほか：写真投影法による筑後川中流域の景観評価，平成5年度土木学会西部支部研究発表会講演概要集，pp.782-783, 1994.
- 2) 野田正彰：漂白される子供たち，情報センター出版局，1988.